

感性の死守

唐沢 真奈

『言葉は』という詩がある。谷川俊太郎の詩だが、「言葉は果実 苦しみの夜に実り 喜びの日々に熟して」というフレーズが忘れられない。国語を学ぶ者として、ことばには適切に敏感でありたいと思う。ところでいま、私のなかに生い茂ることばの一つに「感性の死守」がある。

教育学部国語教育コースの三年生になって、国語と向き合う時間は今まで以上に重量を増すようになった。授業はさらに専門性を増し、自身がことばや学びに向き合う時間も増え、ぼんやりといつも忙しいような気がしている。ところどころでこの一年間で自分自身の余裕が一番なくなるのはいつだろうか。私は教育実習であると思う。かくいういまも教育実習真っ只中。日を重ねるとともに、余裕と元気はなくなる。教育実習に限らず、余裕がない状態では、もろにその影響を受ける。つまり丁寧に生き

られなくなる。まず食を、次に住を、そして衣を、それから、なにより人のことを慮れなくなる。

大切なことは、忙しさのなかにいたとしても感性を死守することではないか。なににも感じなくなっている自分に気づいたら、まずはカメラをもって外に出てみなければならぬ。そうでなければ、なにかに心を揺さぶられる感覚を本のなかにでも音楽のなかにでも、見出していかなければならないと思うのだ。

ところで最近、生まれ変わったら同性になりたいか異性になりたいかという話を人とした。私は生まれ変わったとしても私でありたい。それは今の性に何の不満もないわけでも、異性には何の苦勞もないだろうと思っっているわけでもなく、私は私の生き方を考えていかなければならないと思うからだ。

みなさんのなかに生い茂ることばはなんですか？

(からさわ まな 信州大学教育学部国語教育コース三年)